

支 部 通 信

日本山岳会山梨支部 第3期第15号
令和5年12月14日

2023 第9回やまなし登山基礎講座を終えて

第9回やまなし登山基礎講座を、9月7日から1か月にわたって開催した。山梨学院の支援が終了して2回目の開催。筆者は今回、講座全体の事務を担当した。不慣れから細かなミスが生じたが、会員各位の協力により無事に終了することができたことに感謝する。

4月・5月の理事会で実施要項を検討し、開催までの作業工程等を確認した。講座内容、会場、講師、チラシ作成、周知方法など、この段階で確認できたことにより作業が円滑に進んだと思われる。受講者募集については、各市町の図書館等の公共施設・アウトドアショップなどへのチラシ設置依頼、県広報誌・新聞への掲載、ホームページ・SNSでの情報発信など、あらゆる手段を駆使して広報を行った。その結果、13人の受講生が集まった（前回、前々回の受講生は14人）。かつては山梨学院のダイレクトメールが受講生の確保に力を発揮してくれたが、本支部が全面的に担うことになった現在、この作業は重要であるとともに負担も大きい。



講座の内容は、前回と同様である。初心者を対象に登山の基礎的知識・技術を講義するとともに、登山に伴う危険回避についても講座全体を通じて指導した。また、日本山岳会の活動理念である山の文化的側面の啓発のため、登山史や山岳文学、山岳写真等の講座も設けたが、概ね好評だった。

実践登山は2回実施。第1回は茅ヶ岳山麓にて、地図読み・ロープワーク・セルフレスキューを指導した。第2回は高川山に登頂し、地図読み・ロープワーク・山岳写真などを含めた総合登山を実施した。いずれも受講者の関心は高く、真剣な実践登山講習となった。受講者どうし、また受講者・支部員間の親睦を深める機会として貴重であることも再認識した。

実質8回の開催（令和3年度は新型コロナの影響で中止）を重ねてきた本講座。各テーマの講師が固定していることは課題だと言えるだろう。会員一人一人が専門性を高め、積極的に講師を務める体制を整えていきたい、それが支部の力量を高めることにもつながるはずである。講座を終えての率直な思いである。

なお、アンケートの集計結果、考察等は『甲斐山岳』に掲載する予定である。（矢崎茂男）

第64回木暮祭を開催

前夜から降り続いた雨もあがり、10月15日、第64回木暮祭を予定通り開催した。

木暮祭は奥秩父の山々を登山の対象として世に広く紹介した故木暮理太郎氏（明治6年～昭和19年、日本山岳会第3代会長）の遺徳を偲んで、毎年10月の第3日曜日に山梨県北杜市須玉町の増富ラジウム峡の奥、金山平の木暮理太郎顕彰碑の前で行われ（碑前祭）、今年は第1回（昭和35年）から数えて64回目になった。地元北杜市須玉総合支所増富出張所課長鈴木彰氏、公益社団法人日本山岳会からは前副会長坂井広志氏（現「引き継がれる山岳祭」プロジェクトリーダー）の

ほか、日本山岳会山梨支部員や山梨県内の山岳関係者多数が参加された。碑前祭は JAC 山梨支部事務局長古屋寿隆の司会進行で行われた。主催者として小森良直増富ラジウム峡観光協会事務局長、小宮山稔山梨県山岳連盟会長、北原孝浩 JAC 山梨支部長がそれぞれ挨拶をした。来賓紹介に引き続き来賓挨拶として、坂井広志前副会長が日本全国で行われている多彩な「山岳祭」についての紹介と JAC としてのかかわりについて説明された。これに関連して山梨支部長は主催者挨拶の中で木暮祭は長い歴史があり、支部の最も重要な行事の一つであることを述べた後、本日入会歴浅い会員がいるのでと断って、この木暮碑が 63 年前にここに設置された経緯について説明をした。献酒、献花、乾杯ののち、矢崎茂男山梨支部理事（広報担当）が「木暮理太郎と尾崎喜八」をテーマに、木暮祭恒例のミニ講演を行った。



なお、特別参加された、アルパインクライミング推進協議会代表理事菊池敏之氏からは「瑞牆山はクライミングの場として多くの者が訪ねている。日本を代表するクライミングフィールドとしてさらに整備してゆきたいと考え、山梨県や地元の関係機関にお願いをしているところである」旨の話があった。

最期に山梨県山岳連盟副会長磯野澄也（JAC 山梨支部副支部長）の閉会挨拶があり、碑前祭式典はつつがなく終了した。

木暮祭恒例の支部山行（横尾山）は午前中豪雨により中止となった。（北原孝浩）

山行報告

【霧ヶ峰】

- 山行日：令和5年6月4日（日） ■地図：5万図「霧ヶ峰」
- 行程：敷島総合文化会館—大平駐車場・クリンソウ群落—八島湿原駐車場—登山道—鷲ヶ峰—八島湿原—八島湿原駐車場—蓼科自由農園—敷島総合文化会館
- 参加者：平松清子、小宮山千彰、大澤純二、大澤さなえ、遠藤達也、荻野重行、保坂美佐子、岩間明子

本来の計画では3日に実施の予定であったが、台風2号の影響で順延となった。参加者が少なくなってしまうのは残念だったが、当日は天候に恵まれ、絶好の登山日和となった。

予定通り敷島総合文化会館に集合。車2台に分乗して八島湿原駐車場へ。ここで2名と合流し、さらに車で大平駐車場へ移動する。駐車場から緩やかな林道をしばらく歩くと開けた湿地が広がり、クリンソウの群生が見える。まさに今が見ごろの満開で、緑の中にひととき鮮やかにピンクの花が一面に広がっていた。所々にサクラソウも咲いていて、少し青みがかかったサクラソウのピンクが一層クリンソウのピンク色を引き立てていた。人がほとんど踏み入らない場所のようで、そこかしこから新芽も芽吹いていた。踏みつけないように足元を確認しながら散策を楽しんだ。



八島湿原駐車場に戻り、本日のメインである鷲ヶ峰・八島湿原を巡る緩やか登山を開始した。最初の看板で自生している植物を確認し、山道を一步一步たどっていく。みるからに気持ちよさそうな稜線歩きにワクワクしながら先へと進む。途中、急なガレ場もあるが道は整備されているので歩

きやすい。植物を観察しながら、ゆっくり、のんびり、写真を撮りながら頂上を目指す。後方を振り返ると、下に八島湿原、車を停めた駐車場が見えた。稜線からは、南アルプス、中央アルプスの山々。時折吹く風がとても心地よく、頂上から見える景色がますます楽しみになり、足取りが一層軽くなった。

鷲ヶ峰山頂は360度の眺望で、日本アルプス、八ヶ岳、富士山、浅間山など、壮大な景観が広がる。景色を眺めながら、ゆっくりと昼休憩をとる。日常生活から離れてリフレッシュできる時間。しばらく物思いにふける。下山は八島湿原へと下る。木道沿いには黄色や紫の花が咲いている。「あれ、この花の名前はなんだっけ？ もう花の名前を忘れちゃった」と、大笑いしながら、ゆっくり、のんびりの山行が終了した。

帰りは蓼科自由農園でお買い物。夕飯のおかず、晩酌のつまみ、妻への土産など、それぞれが思い思いに買い物を楽しんだ。買った物を見せ合い、何を作るかの話で盛り上がる。お互いの親睦を深める楽しいひと時であった。主婦には、たまにはこんな山行があっても嬉しい。天候にも恵まれ、和やかな、とても楽しいひと時を過ごすことができた。(岩間明子)

【北穂高岳】

■山行日：令和5年7月21日（木）～23日（土） ■地図：5万図「槍ヶ岳・穂高岳」

■行程：＜1日目＞上高地茶嵐駐車場－上高地バスターミナル－徳澤園－横尾山荘

＜2日目＞横尾山荘－涸沢小屋－南陵－北穂高岳－北穂高小屋

＜3日目＞北穂高小屋－涸沢－横尾－徳澤園－上高地バスターミナル－茶嵐駐車場

■参加者：小宮山千彰、上田謙治、近藤美奈子

3年前に山を始めて以来、穂高連峰は憧れの山だった。西穂高岳は以前登ったことがあるが、北穂高岳は初めて。しかも、山岳会の山行に参加させて頂けるとは。付いていけるのか、隊を乱すことがないか不安を抱えながら当日を迎えた。しかし茶嵐駐車場でメンバーの顔を見た途端、不安も吹っ飛び安心モードに。先輩方の大らかさ、人を受け容れるころの大きさ、ユーモアに満ちた会話、どれをとってもリスペクトするばかり。

上高地はたくさんの観光客に溢れていたが、歩を進めるにつれて少なくなり、平らな道をゆっくり歩く贅沢な時間。私の山とスキーのお師匠様から、「徳澤園のソフトクリームは必ず食べるように」という指示を受けていたので、もちろん頂いた。一番おいしそうなコーヒースフトを選んだ。

1日目は横尾山荘泊。外で缶ビールを飲む幸せ。しかもお風呂も入れる。ありがたいことだ。山の2段ベッドは下界の高級宿に匹敵する。多少のいびきに囲まれながらの宿泊は仕方がないと諦めた。2日目の朝はやや睡眠不足。山荘を発ってまずは憧れの涸沢へ。ずっと行きたかった場所である。壮大な穂高連峰を楽しみながらまたソフトクリームに舌鼓。聳え立つダイナミックな岩稜帯を見上げながら、神様はいると私は実感した。朝の晴れは南陵を登るにつれて曇り空に。鎖場や気を抜けないところも出てきた。しかし、我々は生ビールへ向かってまっしぐら。時々寝不足による眠気が忍び寄る。山小屋でぐっすり眠れるようになりたいものである。先輩方のようにいびきをかいて眠れるように。

そして、ついに着いた北穂高岳山頂。大展望に見とれ登頂の感慨にしばし浸って北穂高小屋へ。かわいらしい小屋である。外でいち早く生ビールを買えるのも嬉しい。別ルートから登ってきた登山者達も、皆いい顔をしている。テラスでビールを飲みながら霧を透かして見る槍のちらリズム。込み上げる幸福感。好きなことができるとは幸せである。お金も、時間も、ここまで連れてきてくれた先輩方も、自分を取り巻く環境も、健康な体と心も、本当にありがたい。様々な感謝の念を抱き、その夜もいびきに囲まれながら眠りについた。



3日目、快晴。穂高連峰がくっきりと並ぶ。先輩方にあの山は〇〇岳、あれは〇〇岳と教えても

らいながらひたすら下山。涸沢でまた感極まり、徳澤園でまたコーヒーソフトとカレー。上高地では登山と観光気分を両方味わった。これが上高地のいいところである。

自宅へ着いて改めて素晴らしい山行だったことを実感した。山岳会へ入ったからこそ行けた山。先輩方、山岳会の皆様に改めて感謝するばかりである。ようし、次はどここの山へ登ろうか。（近藤美奈子）

【第4回家族登山 吐竜の滝】

- 山行日：令和5年8月11日（金・祝日） ■地図：2万5千図「谷戸」「八ヶ岳東部」
- 行程：北杜市営清里無料駐車場—聖アンデレ協会—吐竜の滝—獅子岩—清泉寮—清泉寮ファームショップ—草原の散歩道—駐車場
- 参加者：手崎喜美子、古屋寿隆、北原孝浩、小宮山千彰、渡辺峯雄、窪田光一、大澤純二、大澤さな枝、JAC本部2名、県山岳連盟3名、看護師1名、親子16名

国民の祝日「山の日」は、山に親しむ機会を得て山の恩恵に感謝する日。自然にふれあうとともに山の恵みを肌で感じることで、貴重な自然を理解し未来に残していくことを学ぶ日にしたい。

第4回家族登山、今年は「吐竜の滝」ハイキングコースを選んだ。川俣川東沢溪谷の標高1250m付近にあるこの滝は、落差10m、幅15mの間に、小さな滝が幾筋も流れ下っている。その姿は、まるで竜が水を吐くかのように見える為この名が付いたと言われる。8時半に駐車場に集合。標高1000mを超える清里高原の風は8月でも気持ちが良い。参加者が全員揃ってから、挨拶、準備運動をしてスタート。聖アンデレ協会を過ぎ牧草地に出たところで、八ヶ岳の鮮やかな稜線に出合っただけで足が止まった。再び樹林帯に入ればしばらく下ると、小海線の線路を下方に見る事が出来る。沢の音と共にガタンゴトンと音が聴こえるが、電車はあっという間に過ぎ去ってしまった。写真を撮る事が出来ずに残念。何度か休憩を取りつつ1時間程で吐竜の滝に着いた。

子ども達は思いおもいに遊んでいた。沢に手を入れたり、裸足になったり、岩を渡ったり、家族で記念写真を撮ったり……。真夏の日差しを浴びて火照った体には、沢の冷水が気持ち良い。

吐竜の滝を過ぎると、岩場や滑りやすい箇所、片側が切れ落ちている場所等があつて注意しながら歩いていく。獅子岩橋を渡り樹林帯をつづら折りに30分程登ると清泉寮に到着。ここでお昼休憩にした。富士山や奥秩父の山々を見ながら名物のソフトクリームをいただいた。「清里の父」ポールラッシュの石碑にその功績を学んでから、清泉寮ファームショップへ下って遊具で遊び、草原を抜けて駐車場へと戻った。



私がこのハイキングコースを初めて歩いたのは3年前。見所がたくさんで子どもも大人も楽しめると思った。今回参加してくれた子ども達にとって、自然を楽しむきっかけになってくれたらと思う。（手崎喜美子）

【小太郎山】

- 山行日：令和5年9月9日（土）～10日（日） ■地図：2万5千図「北岳」
- 行程：広河原—白根御池小屋—草すべり—北岳肩の小屋泊—北岳—北岳肩の小屋—小太郎山—草すべり—白根御池小屋—広河原
- 参加者：石澤貴子、小宮山千彰、大澤純二、上田謙治、近藤美奈子、手崎喜美子

今回は北岳と、派生した尾根の先にある小太郎山である。朝、芦安のバス発着所は雨の中の集合だったが、広河原に着いた時、天気は回復し晴れ間も見えてきた。

身支度を整えて出発。白根御池小屋までは樹林の中の急登が続くが、皆元気で特に女性陣は疲れを知らない。白根御池小屋で休憩し、さあ草滑りだ。長い登りが続く。辛い。いくら歩いても森林

限界に着かない。他の登山者達も疲れが顔に出ている。やっと分岐に着き稜線に出て右に小太郎山を見た。岩稜を越して肩の小屋に着いたが、北岳はガスの中で何も見えず、皆で相談して北岳登頂は翌朝に行くこととした。小屋の前で生ビールを堪能し、話が盛り上がる。小屋は快適で熟睡。夜半は満天の星だった。朝4時、ヘッドランプで出発。岩稜を進み程なく山頂に到着。東の空が茜色に染まってくる中、雲海の彼方に富士山が峻立している、感動的な夜明けだ。小屋に戻り朝食を摂り小太郎山に向け出発。皆足取りは軽い。分岐に荷物をデポし小太郎尾根を下る。直ぐそこに見えるが、なかなか着かない。慎重に歩を進め、ようやく前小太郎山に着く。指呼の距離に山頂が見える。たどりついた小太郎山山頂は360度のパノラマだ。北岳、仙丈岳、甲斐駒ヶ岳、鳳凰三山……。小太郎山は渋い山だが魅力的な山である。



山頂の時間をしばらく楽しんで下山する。谷風が心地よい。長い草滑りをゆっくり降り白根御池小屋へ。大休止の後、疲れた足を労わりながら広河原へ下った。今回は肩の小屋でビールをご馳走になったり、徘徊老人達がヘルパーさん達（元気な女性メンバー）に見守られたりしての実に楽しい山行だった。（小宮山千彰）

【愛鷹山】

■山行日：令和5年10月29日（日） ■地図：2万5千図「愛鷹山」

■行程：山神社－大沢橋－割石峠－呼子山－越前岳－富士見台－鋸岳展望台－富士見峠－山神社

■参加者：上田健治、渡辺峯雄、大澤純二、高橋みゆき、渡辺秀子、稲富正彦、岩田晴子、黒沼英美、庭野美恵、藤原正江、石川千嘉、中谷康司、松尾みどり、紺野会里、小栗山大介、小栗山美紀、相川修

知人からの誘いで、山梨支部の山行に参加した。地上ではまだ夏の気配が残っており、10月とは思えない暑い日々を過ごしていたが、山行の日は朝から肌寒く、寒さにまだ慣れていない私は防寒着を着込んで待ち合わせ場所に向かった。メンバーは総勢17名。山梨支部以外に多摩支部、神奈川支部、千葉支部、東京本部そして会員外と大変賑やかで、2グループに別れての出発となった。

愛鷹神社を出てゆっくり標高をあげていると雨が降り始めた。雨は降ったり止んだりを繰り返して、中々レインウェアを脱げない状況を少し残念に思ったが、東沢へ差し掛かるあたりで太陽が顔を出し、濡れた苔やまだ青い木々に光が反射しキラキラと輝いた。まるで美しい庭園の中を歩いているような情景に、雨でむしろ良かったと幸せな気持ちになった。割石峠へ向かう道は少し分かりにくく戸惑ったが、先頭に行くSLの案内でスムーズに呼子岳へと到着することができた。呼子岳から先は痩せ尾根のアップダウンが続き、時折現れる岩場に愛鷹山にもこのようなところがあったのだと少し意外に思った。箱根の大涌谷を横目に何度か偽ピークに騙され「次こそ山頂？」「山頂はまだなの！？」と話しながらやっと越前岳に到着。曇っていたため富士山は望めなかったが、駿河湾と街並みが輝いて見えた。



山頂での休憩中に会員の方から果物を頂いた。果物が美味しかったのはもちろんだが、入れ物にしていた牛乳パックのアイデアが素晴らしく、是非真似させて頂こうと思った。越前岳付近は馬酔木が群生しており、春に再訪したいと思ったが、メンバーの一人が下りながら見える鋸岳の稜線に大変興味を持ったようで、近いうちに一緒にこの山域を再訪することになりそうだ。素敵な時間を過ごすことができ、山行仲間に感謝している。（松尾みどり）

トピックス

醍醐山を愛する会創立 10 周年

令和 5 年 3 月 5 日、醍醐山を愛する会 10 周年記念式典が下部地区公民館において、会員・一般の町内外約 100 名を迎え開催された。多くの方々の並々ならぬご協力をいただいてこの日に至り、特に尽力のあった団体・個人 11 名を表彰させていただいた。関係された方々それぞれに心の醍醐山があり、思い出にひたったことだろう。

平成 24 年 5 月 22 日、東京スカイツリー（634m）開業。思い起こせば、醍醐山がスカイツリーと同じ標高だという発見は、渡辺正悟さんからの 1 本の電話が発端だった。日本中が東京スカイツリーに沸く中、全国の 634m の山を持つ地域は、これに便乗して PR 活動を始めていた。出遅れた醍醐山も、地域の皆様の全面的なご支援で、復活のドラマが始まった。

「面白い事は瞬く間に展開する」「楽しいことは継続する」。スカイツリーの標高は、その後 635m に改訂されたが、これも含めて醍醐山を「進化する山」ととらえている。発足から 10 年、会員は町内外 180 名にも及び、多くの方々に支えられ続けている。これからも地域のシンボルとして常に話題性を持ち、地域を盛り上げ、進化し続けていきたい。（磯野澄也）



滑志田支部員が小説集『椿飛ぶ天地』を出版

元毎日新聞記者で山梨支部員の滑志田隆さんが、『埋もれた波濤』『道祖神の口笛』などに続く小説集『椿飛ぶ天地』（論創社）を刊行した。書名となっている「椿飛ぶ天地」は、俳句に打ち込む主人公が、夏目漱石の「落ちざまに虻を伏せたる椿かな」の句を知り、その実景を追求していく物語。「俳句とは何か」という長年の自問の答えをこの作品に描出したと、著者は「あとがき」で記している。他に「平壤号」を収録。著者が北朝鮮を旅行した折の見聞を、小説として描いた作品である。批判にさらされ続ける彼の国の国民は、家庭の平安を願う普通の人々であることを教えてくれる。

帯には笛吹市在住の詩人でエッセイストの古屋久昭さんが推奨の言葉を寄せている。大変読み応えのある本である。（矢崎茂男）

理事会報告

7月12日	7月理事会	第4回家族登山、第9回やまなし登山基礎講座、中期支部山行詳細案
8月9日	8月理事会	エクアドル交流富士山登山・懇親会、第9回やまなし登山基礎講座
9月13日	9月理事会	第64回木暮祭・横尾山記念山行、役員の方掌
10月11日	10月理事会	第9回やまなし登山基礎講座アンケート分析、第64回木暮祭
11月8日	11月理事会	第9回やまなし登山基礎講座総括、後期支部山行詳細案（古屋寿隆）

編集後記

今号も味わい深い山行記などをお寄せいただきました。感謝申し上げます。山登りという行為は、計画し、登り、そして顧みるもの。今後とも、山の紀行などを積極的に書きください。山登りは一層楽しくなります。また、編集作業に新しい風を送り込んでくれる会員の協力を、切に願っています。

編集 矢崎茂男（広報担当）

住所：408-0114 山梨県北杜市須玉町藤田 502 TEL：090-7734-2788

Eメール：yazaki-s@taupe.plala.or.jp